
手を伸ばせば...

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手を伸ばせば…

【Nコード】

N4381R

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

久し振りに見た彼女は、最後に会った時とはかなり違って、長くなった髪を上で纏め、浅黒く日に焼けた顔は精悍になり、以前から強い光を宿していた目は更に深みを増していた。

バスから降りた彼女は開口一番「遠かった。」と笑い、俺の目の前に立った。

日本に戻ってきて、家には少し顔を出しただけで、そのまま俺の所に来てきたと事も無げに言い、でかいカバンを担ごうとするのでその荷物を奪って担ぎ、彼女の手を取った。・・・これで俺は少し

安心する。彼女はいつもどこかに行ってしまうようで……でも、
こうやって掴まえている間だけは、どこにも逃げ出せない。

彼の想い（前書き）

登場人物は、彼と彼女です。

名前は一切出ません。

短編のつもりで書いたのですが、6500文字あったので三分割しました。

*3話目、更新前に加筆しまして、7000字くらいになりました。

(2011.3.8)

彼の想い

久し振りに見た彼女は、最後に会った時とはかなり違って、長くなつた髪を上で纏め、浅黒く日に焼けた顔は精悍になり、以前から強い光を宿していた目は更に深みを増していた。

バスから降りた彼女は開口一番「遠かった。」と笑い、俺の目の前に立った。

日本に戻ってきて、家には少し顔を出しただけで、そのまま俺の所にやってきたと事も無げに言い、でかいカバンを担ごうとするのでその荷物を奪って担ぎ、彼女の手を取った。・・・これで俺は少し安心する。彼女はいつもどこかに行つてしまいそうで・・・でも、こつやつて掴まえている間だけは、どこにも逃げ出せない。

お互いまだ大学生だった夏、暑い海辺のカフェのテラス席で「卒業したら一年くらい世界を巡ってくる。」と、彼女は決定事項を伝えてきた。

確かに就職活動をしている素振りもなかったし、バイトの時間も長かった。これまでも、時々ふらりとカメラ片手にどこかを数日旅してきたは、ケロッツとし顔で戻ってきて、たくさん写真を見せられたが・・・それは国内での事だった。だが今度は遥か遠く・・・文化も治安も日本とは違う。決まった日程の旅行ではなく、カバン一つで放浪しようと言うのだ。当然俺は賛成なんかできなかった。しかし、「今に不満があるわけじゃ無いけど、もつと羽根を伸ばしてみたいんだ。」と、真剣な目をする彼女には適わなかった。父を早くに亡くし、働く母親を助け家族のためにこれまで色々頑張ってきた・・・これが彼女の最初の我が儘なのかもしれない。そう思うと、「頑張つてこい。」という言葉しか出てこなかった。

彼女は今よりも、もつと先を見ている。

「小さい頃から漠然とカメラマンになりたいと思っていた。」と以前から言っていた彼女は、そのために前に進もうとしているのだ。俺の我が侘でそれを邪魔をしてはいけない。

正直、寂しい思いをしているのは俺だけじゃないか？ という思いが頭の隅にあつたのだが、その後のベッドでいつもより切なそうに、足りない何かを埋めるように求めてくる姿を見ると、それは違うんだという事が分かりホツとして、更に愛しくなつた。

その時俺には、父の知り合いの病院で研修をする話がきていた。が、その話を蹴つて地方に行く事を決めた。俺ばつか楽してちゃ駄目だよなつて、彼女が帰ってきた時ちゃんと隣に並べるくらいの事はしておきたかつた。

彼女の話聞きながら、今の家である古い借家までしばらく歩いた。一年間の旅の話は驚くような事ばかりだが、それを平然と話す彼女に一番驚かされる。

でも、それが彼女なのだ。

家に着くと「本当に古いね。」と彼女は嬉しそうに言った。

新しい狭いアパートよりも、古い一軒家の方が家賃が安かつた。世の中には知らない事がたくさんあるものだ。最初は思ったものだが、
・ 実際住んでみると納得した。それなりの苦労もあるが、それでも今はここが自分の住みかだ。鍵の開け閉めには少しコツがあつて、少し戸を持ち上げないと中でずれて鍵が回らない。そんな様子にも彼女は面白そうに覗き込んでくる。引き戸開けると「この匂い久しぶり。」と、弾む声で先に入って中に上がり込んでいく。やっぱり相変わらずだ。

「これ何の絵？」声だけだが、その言葉で場所は分かる。

荷物を下ろして、アトリエとして使っている部屋に行くと、定位置であるイスの後ろから眺めていた。彼女はキャンバスの前のイスには絶対座らない。そこは俺の場所だからと、妙なルールがあるらしい。

彼女と知り合ったきつかけはこの絵で、彼女の事をよく知る事になったのも絵で・・・そもそも俺が絵描きになりたいとこねて、人生の寄り道をしなければ彼女とは出逢う事すら無かったはずだ。

だから絵は俺にとって特別なもので、二人にとっても特別なものだと思っっている。いくら研修医が忙しくても、止める事はできない。

「この町の風景。」後ろから抱き締めて囁くと「一年って結構長いんだね。絵まで変わるんだ。」とくすりと笑うので、顎を持ち上げてキスをした。

5年前に一緒に買った、揃いの指輪だけの姿で寝てしまった彼女を眺めると、手足に結構な数の傷跡がある。本当にどんな旅だったんだか・・・、シルバーの指輪にも傷がついているが、新しい物が渡せるのはまだ少し先の話だ。

医者として・・・とりあえずでも一人前になるまで、後どれくらいかかるものか。その間にもどんどん先を行ってしまう彼女に、突き放されないように、そして、彼女の隣に並んでも恥ずかしくないように・・・今はとにかく頑張るしかない。

けど今は、今だけは・・・彼女の長い髪を手で梳いて、こつやつて実際に触れていられる事が何より嬉しい。

・・・さて、彼女が目を覚ますまでに何か作っておこう。前は作ってもらってばかりだったけど、今はこんな事もできるんだぞって、驚かせてやるからな。

彼の想い(後書き)

次回「彼女の想い」

彼女の想い（前書き）

「彼の想い」の続きです。
ではごじじぞ。

彼女の想い

やっと会える……それで一杯だった。

日本に戻って……まずは家に帰って、それから特別な人達の所に顔を出して廻って……普通にしていると思ってた。でも、みんなこう言った。「彼のところ行ってくれば？」……私そんなに顔に出た？

聞いてた住所の行き方調べて驚いて、実際に行ってみてもっと驚いた。あのお坊ちゃんに一体何があったんだ？

親は結構大きな病院の院長で、きつと経済的な心配なんか今までした事なくて、兄姉は医者に弁護士、高い外車が普通って……そんな環境で育ってきて、贅沢な事を贅沢だと気付いていない所のある彼が、わざわざ不便な場所に志願して行くなど思いもしなかった。私が旅に出るって言ったすぐ後だったから、ヤケ起こしたんじゃないかって心配したけど、「すごい真剣なのよ。」って後で彼の姉さんが笑って教えてくれたから、そうじゃないって分かってホッとした……けど、何でだろう？

バスから降りると、約束通り彼が迎えに来てくれていた。4つ上の彼は会った時から大人だったけど、この一年でさらに大人になって……うん、惚れ直した。

しばらく居着くつもりで色々詰めてきたカバンを担ごうとしたら、横から取られて持つてくれた。こういう所が相変わらず優しい。そして、手を繋いでくるのも相変わらずだ。

いつも繋いでくるから「迷子にはならないよ？」って、いつか言った事があるけど「お前はなりそうだから。」って返されて心外だった……けど、実はそんなに嫌じゃない。

繋いでる彼の手には、以前と変わらずお揃いの指輪があって、ちょ

つと安心した。「ああいうのがいい。」ってペアリングねだったのは私だけど「じゃあ左手の薬指に。」って彼が言い出した時は「後でキャンセルしたくなっても知らないぞ？」って本気で思ったんだけど・・・ちゃんとここまで続けている。

私の指にもある指輪は、私の宝物であり、彼と会えない間の精神安定剤だった。離れてる間もこの指輪があるからなんとか立っていられた。彼にとつてもそうであつて欲しいなつて・・・私はそんな我が侘な事を思っている。

繋いだ手の久し振りの温度が、嬉しくて・・・恥ずかしくて、落着かなくて、彼の家に着くまで色々といっぱ喋った。

彼の今の家は、それなりの街のマンション暮らしだった私には、テレビや旅先でしか見た事の無いような古い家だった。確かに古いとは聞いてたけど・・・ファミリータイプのマンションに一人で住んでたり、実家も豪邸だし。そんな彼がここつて・・・本当に何があつたんだ？ 確かに広さはあるけどさ。

「この戸はコツがいるんだ。」って、戸を持ち上げるようにして鍵を開けたのは、映像に残しておきたいって思った。はつきり言つて似合わない。今までの彼からはまったく想像がつかなかった。しばらくいるつもりだから、チャンスがあれば撮つておこう。

ドアが開いたら油絵の具の懐かしい匂いがした。うん、これでこそ彼の場所だ。家出中だった彼が実家に戻るまでは当たり前にあつた匂いだ。って事は5年振り？ 実際にはそんなに長い期間じゃなくて、家出は10ヶ月らしくて、私がああ部屋に行つてたのは6ヶ月くらい？ なのにイメージつてのはすごい。

彼の実家にはパンダの心境になれないから行つてないし、彼の方がいつの間にかうちの母さんと仲良くなつて、入り浸りだったから行く必要も無かつたし・・・。

まだ高校生だった時のドキドキした気分を思い出して、つい嬉しくて当時みたいに勝手に上がり込んで、絶対にあるはずのキャンバスを探した。

うん、これこれ。庭のよく見える部屋に、前と変わらない配置で置かれたテーブルに椅子にイーゼル。ソファまでは無かったけど、イーゼルには田んぼの畔あぜにフキノトウがのぞいた長閑な風景のどかの描かれたキャンバスが置かれている。でもこれは何の絵だ？ 彼の絵は、基本的に見たままのものではない。一見風景画だが……・うーっ、お手上げ。「これ何の絵？」いい、分かんないから本人に聞く！

そしたら後ろから抱き締められて「この風景。」って囁かれた。・駄目だって、そんな風に耳をくすぐったら。ずっと求めてた体温感じたら。彼の匂いに包まれたら……今まで結構気を張って頑張ってたのに！「一年って結構長いんだね。絵まで変わるんだ。」って最後に頑張ってみたけど、キスされて……あっさり陥落。

最初は好奇心と独占欲。そこに段々と快感が刻み込まれ……恥ずかしがるなって彼に言われて、彼に溺れる事に抵抗が無くなった。今はむしろもつと溺れたい。激しい快感に乱され、泣かされ……それでも、私は充足感と安心感を得る。彼によってそんな感じにされてしまった……きつと彼は満足してるに違いない。「俺無じじや駄目な体になったか？」前にふざけてそう言われた事があつただ……悔しいけどその通りだ。

でも、何かに耐えてるような、彼の特別な顔が見られるのは私の特権……って、そんな事考えてるってバレたら引かれるかな？……んー、喜びそうな気がする。

勝手に遠くに行つてたくせに何言つてんだって言われるかな？……うん、きつと言わない。心の中では思ってるかもしれないけどさ。

・・・でも喜んで、比較対照が無いんだ。あなたしか知らないから。

彼女の想い（後書き）

次回「それから」

それから(前書き)

「彼の想い」「彼女の想い」の続きで、これで終わりです。
ではごじつぞ。

それから

疲労に負けてついそのまま寝てしまったけど、いい匂いにつられて目が覚めた。

そのままの格好で布団に包まっていた。起き上がって、ご丁寧に置かれてた服を着ようとして、赤い跡だらけで思わず笑った。ごめん、本当に心配させたみたいだね。あなたに不安な思いをさせた後は、いつもこうだ。こんなにマーキングしなくたって、私は無事ここについて、ずっとあなたのものなのにな。

服を着て台所に行くと・・・っていつか土間？ 一段低い場所に無理やり置かれたような古いシステムキッチン、184cmある彼のサイズとあまりにも衝撃的だ。もうどこから突っ込めばいいんだろう？ 可笑しくてたまらない。これも記録しときたい。でもうっかり笑い声が漏れて気付かれてしまった・・・残念。

「起きたか？」

振り返ると後ろに彼女が立っていた。あmazい。あそこ服から出たか・・・丸見えだな。きつと後で怒られるな。

「飯にしよう。そのテーブル。」とりあえず、何も見てない振りをした。

「あ、美味しい。」良かった。彼女が持ってきた酒も出して、食卓に色を添える。まあ俺は付き合う程度で、大半は彼女の喉に消える・・・が、今日はあまり飲む気は無いようだ。

ぬるめの爛で、話をしながら二人でチビチビやる・・・段々染まってくる桜の肌が目に毒だ。でもきつと、俺の方がもっと赤い。遣伝には逆らえない。

朝起きると、隣にいたはずの温もりがなくて一瞬慌てた。でも、朝食を作ってくれていろいろに気付いて安堵した。

朝起きたら一番に大事な人と挨拶を交わし、準備されてた朝食と一緒に食べて、いつてらっしゃいつてキスを交わして、弁当まで持たされて送り出されるのは、少し気恥ずかしいが、かなり嬉しい。

「今日はやけに機嫌がいいな、指輪の彼女か？」と、研修仲間や病院の先生達に見透かされて、からかわれた。俺そんなに浮き足立ってたか？

昼に持たされた弁当を出すと、見覚えの有り過ぎるタッパーで思わず吹いた。あいつこんな物まで持って来てたのか？ 6年前、家出中の哀れな食生活に苛つかれ、これにはいつも差し伸べられた救いの飯が詰まっていた。正直俺はこれで落ちた。当時彼女には、そんな気は無かったらしいが、確実な手段だと思う。

彼が研修先の病院に行つて、一人になった私は洗濯機が回ってる間に何となく掃除して、でも、あんまり散らかつてもいけないのであるという間に終わつてしまい、残りの時間はアトリエで私の知らない絵を眺めた。我流のクセにいい味なんだよな、この絵……。

私達は、画家になりたいつて彼が家出してる時に出会つた。

私が住んでるマンションの一階で、何描くかボーンと考えてる彼が、私には何やつてんのか分かんなくて、追っかけまわしてるうちに何となく仲良くなった。絵のモデルに誘われて……でも何もしてないのにできたって見せられた絵はシウルレアリスムで、何か腹立つほど見透かされたような事言われて泣いて帰つた……けど、そのままなのは悔しくて。菓子パンの袋がいつぱいあつたから、それからしばらく弁当作つて渡して……反撃の機会を窺つた。そして私も彼の内面を見事に言い当て、シヨックを与えたまんま放つてお

いてら、いつの間にか彼別人みたいに変わってた・・・外見じゃなくて内面が。外見は無精ひげが無くなっただくらい。うん、それも結構なイメチェンだったけど。

・・・で、結局こうなってる。

おかしいな、私はどっから惚れられて、私はどっから惚れてたんだろっ？

棚から絵の描いてあるキャンバスを引っ張り出して・・・1、2、3、4、5。おいおい、本当に勉強してるのか？ 初夏の新緑、夏の光、秋の実り、晩秋の紅葉、冬の夜、そしてイーゼルの初春の田園。こんなに季節ばかり描かれると、離れてた時間を思っただけ切なくなる・・・このロマンチストめ。うるっときそうになっただけど、洗濯機に救われた。

・・・でも一枚足りない。

干し終わってから、カメラを抱えて探索に出かける事にした。あんなに絵になる光景があるんだ、私だってカメラに収めてきたい。かなり苦労して鍵をかけて、当てもなく歩き出した。

帰ると明かりが点いていて「お帰り。」と迎えてくれた。夕飯の仕度が済んだ状態で、もって来たノートPCで今日撮ったらしい写真の整理をしていた。「本当にいい景色いっぱいだね。」って笑いながら、写真を見せてくれた。「特にここ、この神社すごいね、空気が違ったもん。」ってこの辺りで一番古いらしい、大きな杉の木が何本も生えてる神社の写真を見せた。ああ、そこは俺も好きな場所だ。空気が違うのは俺にも分かる。俗に言うパワースポットってのは、ああいう所なんだなと思った。「あれだけ雰囲気あれば、何か映らないかなって思ったんだけど、残念。」・・・悪い、それには賛同できない。

「何で春の絵だけ無いの？」夕食の後不意に問われた。春・・・桜の時期は二人にとって思い入れのある特別な季節だ。二人の生まれた季節で、二人が付き合い始めた季節で、これからもうすぐやってくる季節だ。出会ってから一昨年までは、毎年二人で桜を見て、互いの誕生日を祝ってきた。

だが去年は、彼女は日本に居らず、俺はここに来たばかりで・・・はつきり言って絵など描いてる余裕が無かった。「次は絶対描く。」って言ったら「楽しみだな。」って口元をほころばせた。

* - - * * - * * - * * - * * - * * - * * - - *

まずい。居心地が良過ぎる。しばらく居つくつもりだったけど、長く居れば居るほど戻れなくなりそうだ。この数日一緒に居て、やりたい事、やらなきやいけない事を投げ打ってでも、このままここに居たいという思いが段々強くなってきて、危機感を覚えた。彼と居るのは楽しくて、幸せで、時間の感覚を忘れてしまいそうだ。具体的にいつまでに帰るって用事も無いから、ずるずると過ぎてしまいそうで・・・でも、駄目だ。

「あと一年頑張ったらさ、そしたらとりあえず帰れるから。」指で髪を梳かれながら、彼の声を聞いた。「まだやる事あるんだろう？」うん、仲間と合同で夏に作品展やる約束と、趣味から仕事にするための努力と、もっともつと学ばないといけない事がたくさんある。やっぱりお見通しなんだね？

うん、去年はできなかつたから、今年は一緒に桜を見よう。そして私・・・ちゃんと帰れるから。

嬉しい。楽しい。この時間は幸せだ。でも、これはまだ仮初かりそめのものだ。それをしっかり自覚しておかないと、この錯覚に負けてしまう。このまま彼女を縛り付けてしまいたい。甘い悲鳴を聞きながら何度

もそんな事を考えた。でもそんなズルイ事はできない・・・彼女の
ためにも、俺のためにもならない事だ。
彼女もきつと同じような事を考えている。時々見せる表情がそれを
語っている。

・・・潮時だな。戻れなくなる前に、手を離さなければならぬ。
そうすれば、きっと将来きちんと迎えに行けるから。

* - - * * - * * - * * - * * - * * - * * - - *

「うん、頑張る。」 継らないであなたの隣に立っていられるように、
今頑張らなきゃいけないんだ。来る時乗ったバスに再び乗って、繋
いでた手を離れた。電話もあるし、ネットもある、映像だけ顔を見
ながら話もできるから・・・でも、ここにはもう来れない気がする。
だって帰りたくななくなっちゃうからさ。どこに居ても仕事ができ
るようになれば、それも可能かもしれないけど・・・まだ今は
仕事でもないんだ。

一年後、胸を張って会えるように・・・今は。

それから（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

今までに、私のお話を読んだ事のある方は、
この彼と彼女が誰か想像つくと思います。

でも今の所、シリーズには含めません。
だから、彼と彼女で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4381r/>

手を伸ばせば...

2011年3月22日16時42分発行